

月夜の照らす 怪物



江口 祐介

江口祐介短編集

月
夜
の
照
ら
す
怪
物

夢が過ぎたら
月夜の照らす怪物
ソラリスの風
ネバーランド

夢がすぎたら

バチバチと火の子が飛ぶ音。

じりじりと頬をくすぶる熱で僕は浅い眠りから目覚めた。

「ちょっと、疲れちゃったね」

女性の声が、脳裏に残った夢の余韻から現実に僕を引き戻す。

どんな夢を見ていたかは、その瞬間に忘れてしまったけど、きっと今の僕自身を夢見ていたんだと思う。

疲れているんだと思う。

地面にあぐらをかいていたら、　　いうとうとして、い　　の間にか寝てしまったんだ。

どれぐらい寝ていたんだらう？

僕はゆっくりと顔を上げ、声のする方向、たき火の向こう側にしゃがみ込んだ女の人の顔を見た。

白く透き通った肌、首の後ろで赤い帯で結った銀色の長い髪、まるでドレスのようにも見える赤いローブに、蒼水晶の埋め込まれた銀のネックレスに、同じく赤い手袋。

瞬間、目と目が合い、優しさを浮かべた蒼水晶の色と同じ吸い込まれるような蒼い瞳にれ、胸が高まり詰まるような息苦しさを感じた。

僕はなぜだかたまらなく恥ずかしくなり目をそらして、たき火の中を見た。

薪は静かな炎を宿して力強く燃えていた。

「うん・・・」

僕は彼女と目を合わせず彼女の向こう、西日に真っ赤に染まったアナマ連峰を眺めながら言った。

もう夕方になっているらしい。

「そう」

それは彼女のよく口にする言葉。

彼女がこの言葉を口にする度、僕はちょっと切なくなる。

その言葉は僕のことを優しく認めてくれているようであり、同時に僕のことを諦めて見捨てているように冷たく感じもする。

今のはどういう意味なのかな・・・？

僕は下から顔色をのぞき見ると、向こうも僕のことを見ていたのか、再び目と目が合って微笑まれた。

「どうしたの？」

「なんでもないよ」

僕はほほえみ返しながら言った。

僕は立ち上がって彼女に背を向けて、アナマ連峰に向けて少し歩いた。

何処までも続くような草原に、大小さまざまな岩がまるで円を描くように並んでいる。

僕はその内の平べったい大きな岩に乗っかろうと、ジャンプして手をかけると一気に上った。

僕の身長と同じぐらいの大きな岩だけど、この広大な草原からしてみればほんの石ころなんだろうな。

遠くを見れば見るほど、ちっぽけな自分のスケールに気が付く。

草原の果て、夕日に包まれた山は目に見える限り何処までも、まるで世界を覆う壁のように連なっている。

世界の壁、その言葉を子供のころから聞かされていたけど、こうしてそこから見ると本当に壁のようだった。

「マハラードの神とカルタスの神に祝福された、何人も犯すことの出来ないこの世の果てなる世界の壁、アナマ霊峰。

我らの世界。

神々が帰るべきこの山を護るは、神の印を背に焼き付けられた、屈強なる我らアナマの民。

神が与えられたこの時間、神のために使うが我らが宿命ぞ」

僕はふと無意識のうちに口にしていた。

「山守の誓いよね？」

後ろから彼女の声がした。

「まさか、聞いていたの？」

「実はばっちりと聞きちゃったわ」

独り言を聞かれていたなんて、恥ずかしくてたまらないよ。

思わず耳が熱くなった。

きっと、僕の顔は真っ赤になっているんだろう。

「アナマに生まれた男の人は当たり前のようにみんな言えるんだ。

学校で毎朝言わされて育ってきたからね。

だから油断すると口にでちゃう。

本当は言いたくないんだけど・・・」

「そう」

彼女はそう言うと岩に上ろうとするが、思うように手が届かなくて上ることができない。

一生懸命ジャンプしても、全然手が届かないんだ。

彼女は自分からしてみたら、長い間旅をしているし、いろんなことを知っているから、大人っぽく思っていたけど、こんな彼女を見ていると、なんだかかわいく感じる。

そんな彼女を見て僕はほほえみを浮かべていた。

「そんなに私が上がれないのがうれしいの？」

ちょっと怒っているかも。

「ううん。

そんなわけじゃないんだ」

ただ、かわいいから見ていたくなって、思っただけだよ。

そう思ったけど、僕は口に出すことはなかった。

僕は手を差し伸べると、彼女はそれに答えて僕の腕を強く握った。

手袋の上から彼女の暖かい体温を感じた。

「よいしょ」

僕が引っ張ると、彼女は岩に手をかけて身軽に上った。

「ありがとね」

彼女は言うとはの上で大きく延びをした。

草原を柔らかい夏の風が吹き抜けて、草原の草木を揺らしてサアッと音を立てる。

彼女は風に髪を撫でられ、その柔らかい銀色の髪をなびかせながら、遠い目で赤く染まったアナマ連峰を眺めた。

彼女はその蒼い瞳の向こうに何を見ているんだろう？

「あの山のふもとに君の故郷があるのね」

「うん」

僕は遠くを見ながら言った。

「隣、座って良い・・・？」

「いいよ」

彼女が僕の横に膝を抱えて座り込んだ。

肩と肩が擦れ合った。

僕はドキッとする。

すぐ間近に彼女の体温を感じる。

速まる心臓の音、息の音、もしかすると聞かれるかも知れない。

横を向けば彼女はそこにいる、そう思うとますますどきどきして、僕は横が気になるのを無視して不自然なまでに遠くを見めた。

「アナムから、結構離れちゃったね。

もう、3日も歩き続けているんだものね」

「まだ、3日だよ」

僕は言った。

「帰りたい？」

何でそんなことを聞くのかな・・・？

僕は間近に見える彼女の顔を見た。

彼女も僕を見ていたらしくて目があった。

目があっても視線を反らさず、僕はじっと彼女の目を見続けた。

その瞳の向こうには、まだ何も見えない。

「帰りたくないよ・・・！」

離れたくないって、もしかするとそう思ったのかも知れない。

自分でも解る程度の少し強い口調になっていた。

「村が嫌いななの？」

極端な彼女の質問に僕は驚いた。

自分でもそこまでは思っていないよ。

「そんなわけじゃないよ。

・・・ただ、村にいと退屈なんだ」

僕は声を落ち着けて言った。

「そう・・・」

彼女は黙って僕の話の聞いている。

「退屈だからと言ってやることがない訳じゃないんだ。

学校に行って、山守の誓いを言って、じいちゃんの農業の手伝いをして、あとは疲れて寝るだけ。

明日はまた同じことの繰り返し。

いか学校を卒業しても、山守になって、今とそう変わらない毎日を過ごす。

村で過ごす変わらない日々が退屈なんだ。

本当はもっとやりたいことがあったはずだけど、い の間にかにそれも忘れて、何も出来ずに毎日があっという間に過ぎていく。

何も出来ないままい か年をとって死んでしまう。

僕はそれが怖いんだ。

そなんじゃ本当に生きているんだか解らないから」

彼女はゆっくりと口を開く。

「旅をしていても生きるために働かないといけないのは一緒。
旅人は街から街へと渡り歩き、物を売っては買って行商を
して 金を稼ぐの。

金がなければ食べることは出来ないから」

気が付くとあたりは暗くなり、薄い闇の中に行く かの星
が輝きだした。

瞬く間に日は沈み、一面目の回るぐらい見渡す限りの星空
になる。

人工の光がないとても綺麗だ。

僕らは火を囲いながら、携帯した食材に火を通して口にす
る。

夜になると肌寒く、少し水っぽいけど暖かい麦飯が いし
く感じる。

「さあ、ご飯も食べ終わったし、そろそろ寝ましょうか」

そう言って彼女が電気式のカンテラを消すと、闇夜を照ら
すものは月光りと消えかけたたき火だけとなった。

さっきまで灯りがあったから気が付かなかったけど、暗く
なってさっき座っていた円状に並べられた岩がわずかに青白
く光っていることに気が いた。

「岩が光っているよ」

「・・・ちょっと、近づいてみましょ」

彼女はカンテラと護身用のナイフを手にすると岩に向かっ
て歩き出した。

僕もその後続く。

10メートルぐらい離れたところの岩陰から光る岩の円を

見ると、円の中央で青白く光る人影がいることに気が付いた。

蝶のような羽が生えた綺麗な女の子が踊っている。

「妖精・・・？」

僕は小声で彼女に聞く。

「ううん、違うよ。

岩に焼き付いた大昔の人の記憶の残像よ。

きっと、前はこの辺に村があって、その村の 祭りの様子
だと思う」

「ふうん・・・」

まるで妖精のような不思議な服装、幻想的な踊り。

僕はしばらくその昔の人の踊りに魅入っていた。

「実はね、私、踊ったことないの。

小さい頃から旅暮らしをしていたし、華やかなこととは縁
がないのよ。

街の酒場で人が踊っているのは見たことあるだけ
ど・・・」

「踊り、上手そうなのにね」

僕は思ったままいった。

「そ、そうかなあ・・・？」

それより、君は踊ったことあるの？」

照れを隠しながら彼女が聞く。

その照れ笑いが僕の心を掴む。

「盆踊りだったらね」

「盆踊り？ 聞いたことがない不思議な響きね。

きっと、素敵な踊りなんでしょうね」

僕は彼女の言葉に思わず笑ってしまう。

「盆踊りはあんまり素敵なお踊りじゃないよ。

ご先祖様に贈る古い村のお踊りなんだ」

彼女は期待に満ちた目で言う。

「踊ってみてよ」

「ええっ！ 恥ずかしいよ！！」

「下手なの？」

「そうじゃないけど・・・」

「じゃあ、踊ってよ！」

彼女の目はまっすぐ僕の目を見ていた。

まじまじと見るとかわいい顔をしている。

僕はドキッとすする。

「わ、わかったよ」

僕は目をそらしながら言う。

「やったー！」

そして、僕は盆踊りを踊り出した。

奇妙な手つき、奇妙な足取り・・・。

何を表しているやら全く解らないこの踊り。

毎年毎年踊らされ続けた僕の体には、すっかりそのリズムが刻み込まれていた。

僕の踊りを見ていた彼女は吹き出した。

「キャハハ・・・！ もしろい踊りね！ とても不思議なお踊りで素敵よ」

そう、自信があればあるほど、この踊りは恥ずかしい。

踊り自体が妙ちくりんで恥ずかしいから。

僕は顔が真っ赤になった。

「ねえ、他の踊りは踊れるの？」

「そういえば学校の運動会の時に踊ったなあ・・・」

名前はなんだか忘れたけど、女の子と手を ないで踊らされて、凄く恥ずかしかったのを覚えている。

「一緒に踊ろうよ！」

そういうと彼女は僕の手を握って引っ張った。

手袋を脱いだ彼女の手は暖かくて柔らかかった。

不意を付かれたからものすごくドキッとした。

口から心臓が飛び出すんじゃないかって思った。

僕は学校で踊ったリズムを思い出しながら、彼女をリードして踊る。

彼女の手を持ち、ステップを踏みながら、引き離したり、引き寄せて腰に手を回す。

彼女が踊ると彼女のその長い銀髪が宙に舞い柔らかいのにを漂わせる。

間近に見える彼女の顔、 ないだ手と手、密着した体。

彼女の体温を、存在を体中で感じる。

はじめはとても恥ずかしくてガチガチだったけど、次第にリズムに乗って楽しくなってきた。

僕らはきらめく満天の星空の元、この大地を舞台に、虫たちの鳴き声にあわせて踊った。

とても彼女が愛 しく、そんな愛 しい彼女を近くに感じる。

そう思うと幸せでたまらなかった。

こんな時が永遠に続けば良いとそう思った。

だけど時は瞬く間に過ぎていく。

まるで夢のように・・・。

二人だけのダンスパーティの後、テントの中で僕は言う。

「僕は、村にいるより、君と旅をしている方が楽しく思うよ」

真っ暗で見えないけど、僕は彼女の方を向いた。

「それは旅をして心の中の自由を知ったからよ。

生きるためには働かないといけない。

大切なのは生活に自由を求めることよりも、生活の中で自由な心を持つことだと思う。

心の中に自由さえあれば、たとえいっぱいいっぱいでも、いろんなことを新鮮に感じていられるから」

「僕は君の後を追って旅を始めたけど、それがあまりに楽しくて、幸せすぎて、まるで夢のようで、い か夢から覚めたら村にいてい もの生活が始まるんじゃないかと不安だったんだ。

村での生活が夢なら良いのになって、3日間ずっと思っていた。

でも、い までも旅ができる訳じゃない・・・。

夏休みが終われば学校に行かないといけない。

い か僕が村に帰る時が来て、君と別れる時が来るって考えると辛いんだ・・・。

・・・考えたくなかった」

僕は自然に涙が出ていた。

僕は嗚咽を殺して言う。

「でも、これはい かは覚める夢なんだ・・・」

ずっと彼女は僕の髪を撫でた。

その優しさに僕はよけいに涙がこぼれた。

「今はまだ覚めれば終わってしまう夢かも知れないけど、でも、夢は追い続けて適えることができる。

夢を叶えるのは辛いかも知れない。

でも、心に自由と負けない強さがあればそれを現実にする
ことも出来るのよ！」

彼女は僕の涙で濡れた両頬に両手をあてる。

そして、その次の瞬間、僕の唇に柔らかいものが触れた。

目の前に彼女の顔があった。

僕は彼女のその手を強く握る。

「一人での旅よりも君との旅が楽しいから。

だから、私、君がい か追い いてくるの待っているからね。

だから強くなってね・・・！」

「・・・」

僕は彼女を強く抱きながら声を殺して泣いた。

やがて泣き疲れて寝てしまうまで。

明日になっても夢は続くだろうか？

夢だと解っていても、今はまだ夢を見ていたい。

やがて、夢が覚め現実に戻ったとしても、僕の心にはその思
い出は残る。

だから僕は強くなれる。

夢を夢で終わらせない為に・・・。

もう一度、君に会うために・・・。

月夜の照らす怪物

無理矢理に目を むれば、悪夢のような現実が脳裏に浮かぶ眠れない夜。

月明かりすら照らす事の出来ないほど黒く、深く、静まりかえった夜。

闇夜に浮かぶ小さな四角い空間を照らし出す物は、TVから垂れ流されるモノクロームのB級映画だけ。

誰かの息づく音さえ聞こえないその空間に、TVから漏れたノイズ混じりの音声が呟いていた。

い しか、自分としての思考を止め、全てはTVから流れるモノクロームの映像だけが全てに成っていた。

そこは何処なのだろう？

白い月と、赤い月。

二 の月が夜空に輝く世界。

人里から離れた山の麓に広がる闇色の森。

カチカチと頬を照らすカンテラを手した男が、長い両刃の剣を闇へと突き出しながら、一步一步、恐る恐る森へと踏み出していく。

暗い画面に映し出されるは安っぽく輝く剣と、わざとらしく両目をきよるきよるさせた黒っぽく見える男の顔だけ。

キーキーとエンドレスに繰り返す鳥の鳴き声。

ドクンドクンと鳴り響く男の心臓の音。

ビーボービーボーと単調に鳴り響くBGM。

せわしなく画面が揺れ、カンテラの光によって照らし出さ

れる森の木々は、ビニールっぽくて嘘っぽかった。

だが、何故か生まれるはるか昔の映画は、今の映画にない臨場感があって、その恐怖に自分の心臓まで早鐘を打つ。

そんな緊張の場面がこれでもかと言うぐらい続く。

まだか、まだ何も起きないのかと、待ちわびたが、結局何も起きずTVの中の男がホッと胸をなで下す。

自分も安心しきっていたのか、切り株に腰を下ろした男の姿をぼんやり眺めていると、まるで心霊写真のように森の奥の闇に、この世の物と思えないような形相をした怪物の顔がぼんやりと浮かんでいた。

突然のことにドクンと自分の心臓が跳ね上がる。

どさっ、と男が腰を抜かして後ずさりして、慌ててカンテラを闇へと突き出す。

カンテラと、木々の間からうっすらと差し込む月明かりが、その森に潜むモノ達を照らし出す。

よく見ると丸坊主の人間に角を付けて、少しメイクをしただけの笑ってしまうぐらい安っぽい怪物。

だが、得体の知れない気色の悪さがあり、一刻も早く男の手にした剣で怪物を殺して欲しかった。

「やはり、この森には怪物がいたか・・・！」

画面の下に汚い字で書かれた字幕が流れる。

男が剣を握りしめ、怪物の方へと剣先を向けると、怪物は背中を向けて走り去る。

あんな怪物を生かしては けない。

男はカンテラと剣を手に、びょうびょうと迫り来る林の中、

怪物を追いかける。

そして、怪物を見失った時、森の奥にポツンとした灯りをともす小屋が現れる。

男は小屋のすぐ近くにある切り株にカンテラを置くと、剣を片手で強く握りしめ、思いっきり小屋の戸を開け放す。

過剰なまでの明るい光が男の視界を照らす。

やがて、その明るさに目が慣れると、そこには優しげな笑みを浮かべる華奢な若い男が立っていた。

「こんな所に人が住んでいるのか・・・？」

男が手にした剣を腰のさやに収めると、若者は小屋の中へと誘った。

小屋の中は暖炉があり、小さなカンテラの光がテーブルとベットを照らしていた。

男は若者に誘われるまま、テーブルの椅子へと腰を掛けると、若者が差し出したコーヒーのカップを両手に包んだ。

若者はベットに座ると男に向かって話しかける。

「こんな夜更けにこんな所に来るなんて、どうしたんですか、侍様」

字幕に「侍様」と出ていたが、どちらかと言えばこの男は騎士と言った方が良いような趣である。

きっと和訳した人間が日本人に解りやすいように訳したのだろうが、余計にややこしくなっている気がする。

「近頃、里に怪物が現れ悪さをするようになり、どうやらその怪物がこの森に潜んでいるようなので、この私が退治しに来た」

何故か男の腰に差した剣の束の部分がキラッと光る。

「ですが、侍様。

この森には怪物など居ません」

若者が話している間中、眉間にしわを寄せた男の顔のアップが映り続ける。

表情を変えず淡々していた。

「だが、現に私はこの森で怪物を見たのだ！」

画面が若者へと移る。

「この森に居るのは、自らの罪を懺悔するこの方達だけです」

若者が小屋の戸を開け放と、闇夜の中に先ほどの怪物が、10体ほど顔を並べていた。

「やはり怪物はいるではないか?!」

男が声を荒くして言うと、若者は苦笑する。

「この方々が怪物というならば、この私も怪物です」

若者の顔のアップになるが、その顔は女性的であるものの、正真正銘普通の人間の顔だった。

「何を言う、そなたは人間ではないか!!」

男が吼えたと、月夜の森に潜む怪物達をその剣でなぎ払っていく。

「止めてください 侍様!!」

若者の制止も聞かず、男の全身が怪物達の流した赤い血で染まっていく。

その色はまるで、空に浮かぶ赤い月のようだった。

そして、全てをなぎ払うと、夜の森はしんと静まりかえった。

「人間は誰でも、怪物になれるのです。

私と彼らの違いは罪を犯したか、犯していないか、ただそれだけです。

罪を顔してしまう恐怖に耐えられない私は、人里を離れて罪を犯してしまった方々の懺悔を聞き入れて生きていたのです。

誰よりも罪を犯してしまった方々の気持ちが分かるから・・・」

「何を言っている！？ 怪物は怪物だ！！ 蔑み殺して何が悪い？！」

男は悲鳴に似た声を上げる。

場面は再び若者のアップになる。

「侍様・・・。

あなたのような人がいるから、怪物は生まれるのです・・・！」

若者が男に向かってナイフを突き出すと、その刀身には化け物へと変わり果てた男の姿が写し出されていた。

「この私が怪物だと？！」

そして、画面が赤く染まる。

怪物と化した男の腹にナイフが食い込んでいた。

「そして、罪の衝動に負けた私も怪物です・・・」

どさっと男が倒れ込むと、窓越しに映し出された若者の顔が怪物に成っていた。

そして、もくもくと暖炉の煙立 闇色の森の上には、白い月

と、赤い月が輝いていた。

その夜空を背景に　どろ　どろしい音楽が流れ、スタッフロールへと続く。

放心状態のまま、気が付くとTVの画面は砂嵐を映し出していた。

リモコンの電源ボタンを押すと、パシッと言う音共に画面が真っ黒く染まる。

風で雲が流され、部屋の小さな窓から月明かりがさす。

月夜の照らす怪物。

それは・・・。

月明かりに照らし出され、真っ黒いTVの画面に映し出された自分の顔は、映画に出てきた怪物の顔そっくりだった。